

史跡 石清水八幡宮境内(八角堂)



平成 31 年 3 月に保存修理工事を終えた八角堂

八幡市を代表する歴史的文化遺産である石清水八幡宮は、木津川・宇治川・桂川の三川が合流する地点にほど近い男山に鎮座しています。その境内は、古代から神を祀ってきた神域であり、さらに地面の下には、かつて石清水八幡宮が神仏習合の宮寺であったことを示す仏教施設などの遺構が数多く残っていることから、日本の宗教史を知る上で重要な空間であると認められ、平成 24 年(2012)に国の史跡に指定されました。

八角堂は、江戸時代まで石清水八幡宮の境内にあった仏堂で、明治時代に移築されて今日に伝わった貴重な建物であるため、石清水八幡宮境内が史跡に指定された際、八角堂の移築地もあわせて史跡となりました。

八角堂の沿革

創建は鎌倉時代

鎌倉時代はじめの建保年中(1213～1219)、順徳天皇の発願により、石清水八幡宮検校の善法寺祐清が境内の西谷に建立したと言われています。この頃のことは詳しくわかっていません。

2 度の建て直し

慶長 12 年(1607)に豊臣秀頼が小出吉政を奉行として再建しましたが、その後、建物が大きく傷んだため、元禄 11 年(1698)に石清水八幡宮別当の善法寺央清が広く寄付を募って再興しました。この時、建物の規模が 2 割ほど小さくなったと考えられます。それから 50 年後の寛延元年(1748)には、屋根を中心に修理が行われました。

男山の麓に移築

八角堂が建っているこの地は、古墳時代前期の前方後円墳である西車塚古墳の後円部にあたります。明治時代のはじめ、政府の神仏分離政策によって、石清水八幡宮の境内から仏教にかかわる建物や道具が取り除かれました。そんななか、八角堂が失われることを惜しんだ正法寺の前住職志水円阿が八角堂を本尊と共に譲り受け、明治 3 年(1870)、現在地に移したのです。移築の際、建物の向きを東正面から南正面に改め、外陣は床板張りにしています。

収蔵庫を設置

昭和 37 年(1962)、本尊を収めるための収蔵庫を内陣に設置しました。その際、三方の欄間建具を取り除いています。昭和後期になって、八角堂の南西に新たに鉄筋コンクリート造の東屋が建てられました。

明治時代の姿を復原

その後、時間の経過とともに建物の傷みが激しくなり、修理が必要な状態になりました。そこで八幡市は、平成 25 年(2013)に八角堂を公有化し、国や府の協力をえて本格的な修理をはじめました。平成 26 年度から 5 年間の工事によって、平成 31 年 3 月、八角堂は明治時代の美しい姿を取り戻しました。

本尊 木造阿弥陀如来坐像について

八角堂の本尊である阿弥陀如来坐像は鎌倉時代の作で、昭和 25 年(1950)重要文化財に指定され、平成 10 年(1998)に京都国立博物館に寄託されました。

その後、平成 20 年(2008)には正法寺(八幡清水井)の法雲殿に移され、現在は正法寺が境内を一般公開する際に見ることができます。

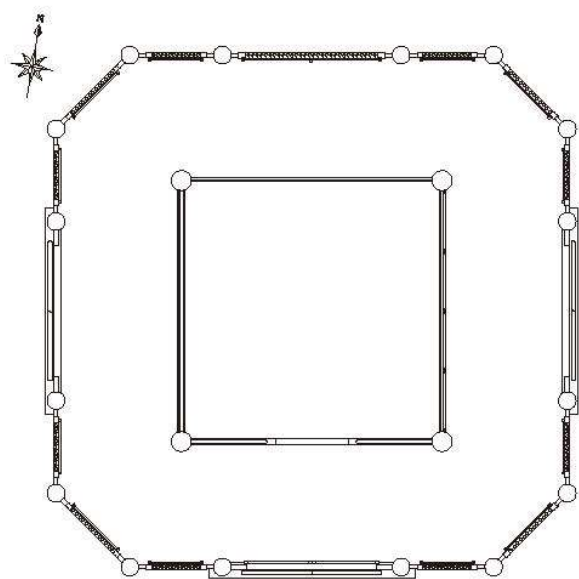


昭和 8 年(1933)に本尊を修理した際の堂内の様子(文化庁保管写真)

八角堂のみどころ

隅切形八角

八角堂を上から見ると、正八角形ではなく、正方形の四隅を切り取った形をしていることがわかります。これは、石清水八幡宮に特有の建物の形ではないかと考えられていて、八幡市では隅切形八角形と呼んでいます。

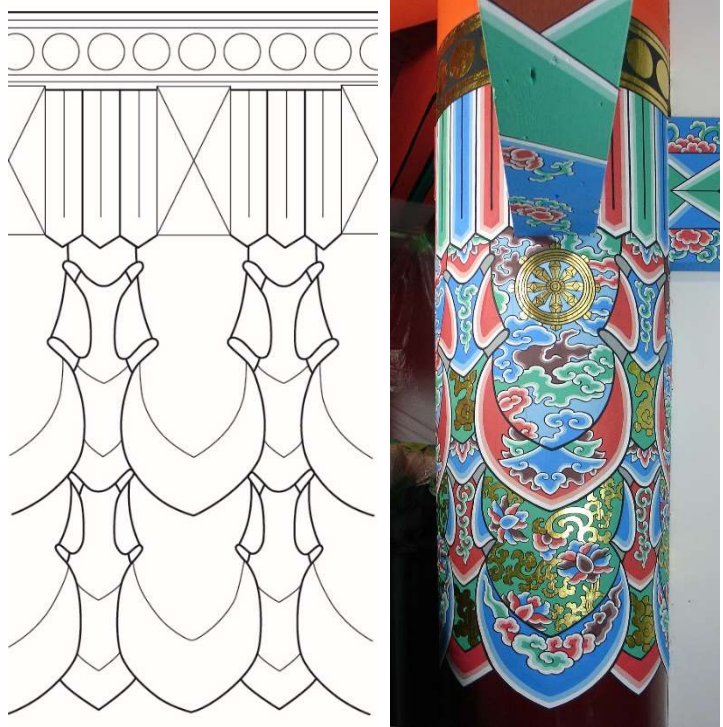


八角堂平面図

彩色

江戸時代、八角堂の内部を飾っていた彩色は、時とともに失われ痕跡のみになっていたため、明治時代に八角堂を移築した際、ふたたび彩色が施されました。この彩色は、昭和 37 年(1962)の収蔵庫設置にあたり塗料で覆い隠され、長く人の目にふれてきませんでしたが、今回の修理工事を機に調査を行ったところ、江戸時代、明治時代それぞれの時期に描かれていた文様や色が明らかになりました。

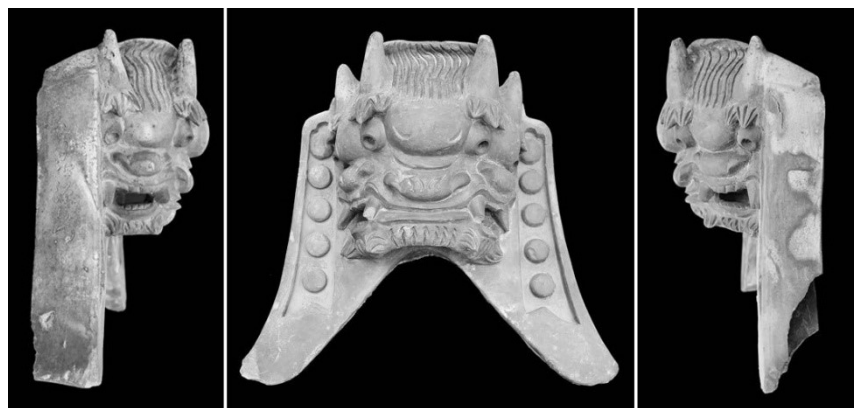
昭和 8 年(1933)に本尊を修理したとき撮影された写真にも堂内の彩色の様子が生写っていたので、この写真と調査結果とを参考にして、明治時代の彩色を復原し、また建物全体を塗り直したのが現在の八角堂の姿です。調査によってあらわれた文様の一部は、塗りなおさずそのまま保存しています。



柱の彩色復原図と復原後の様子

瓦

八角堂の屋根には 16 面の鬼瓦を据えています。同じ表情のものはひとつもありません。鬼瓦の多くは、元禄再興時のものや寛延元年(1748)の修理にあたって新調されたものをそのまま使用しています。



三面鬼の瓦(左側面・正面・右側面)

東北東の角にある鬼瓦のうち上側のひとつだけは、鬼の顔が 3 つ組み合わさっためずらしいデザインです。